



Queen at a house

by J. S. S. S. S.

published in 2000 June, 19th.

金の鏡

ぎんより価値があったとして
ぎんの鏡にはるかに劣る
盗人に魅入られはされど
美女の視線を集めることはなく
ただそのうちに、価値のみが
宿る1つの塊に

偽預言者は言う
ああひとびとよ
あなたは金であれ
鈍く光る金の鏡であれ
月も太陽も
同じく鈍く映す金であれ
銀の鏡は仕えたとして
割れてしまえばそれぞれまで
金の鏡の価値はとどまる

その価値にこそいみがある
やくにたつたたないではなく
いみなく価値があることにこそ
ほんとうのちがあるのだと

それを聞いた銀の鏡
怒りに水面を震わせて
人々に言う
金の鏡は薄ぼんやりと
あなたの美貌を写しはしない
黄ばんだ瞳に醜い八重歯
あなたはそれで満足か？

美女たち皆思い直し
金の鏡を集めると
乾いた井戸に放り込む

ただ、多くの金の鏡は
そのまま壁に収まり続ける

あくまで、美女よりその他のほうが
多いのは自明で
見えぬ価値こそ好まれて
金の鏡は永遠に
黄色く光り、薄ぼんやりと
その価値のみで好まれる

クインタトウージュ

クインタトウージュズリズリ歩く

麦の矢を投げられながら

6年前まで王の娘

リスの毛使った襟巻まとい

金の髪もつ若き騎士

背中に羽こそないものの

その恍惚は天使に勝る

騎士にささげた血だまりシート

メイド頭がぶりぶり怒り

エジプト綿の縦糸と

シルクの横糸交わしたシート

1枚足りないと王に言う

王は声こそ漏らさぬものの

床から離れぬ鉄の靴

履かせ娘に言い放つ

この靴二度と脱ぐことならん

クインタトウージュ顔色も変えず

解りました。お父様

この足は靴にあげましょう

その足に接吻する為ならば

インドの胡椒を船一杯

アラビアの香料を蔵いっぱい

惜しまぬ王もいるというのに

クインタトゥージュは気にも留めず

墓場に花束置くように

足首切り捨て城をでる。

4年前まで領主の妻

金の髪持つ騎士と結ばれ

揺り椅子の上で生活する

祈るときだけ足首に

絹のクッション押し当てて

ぐらぐら揺れつつ祈りをささげる

夏の声さす教会の

腐りそうな懺悔室

ないはずの足に痛みを感じ

さすっておくれと牧師につきだす

ラテン語で謝罪をつぶやき

去ろうとする、牧師のヒエロニムス

クインタトゥージュ逃がしはせず

神の黒衣を床敷きに

アダムとイブも顔をそむける

行為が終わった傍らに

剣と鞭持つ領主がそこに

牧師の首を跳ね飛ばし

遺体を何度も打ちすえる

クインタトゥージュあくびを一つ

落ちたバラを髪にさす

領主は瞬きもせず

床に落とした菓子を見る目で

好きなところへ行くがいい

ただし、黙って行かせはしない

首に縄かけ馬で引きずり

膝から下を削り取る

2年前まで富豪の妾

ミルクの風呂に薔薇の床

足には白いパンをはめ

付いた名前が豊穡の女神

ある年起こった寒波の為に

枯れた大地と病んだ風

蔵は広間になり果てて

親の愛よりパンが勝り

1食おしさにこどもをすてる

クインタトゥージュ気にも留めず

素知らぬ顔で、パンを履く

とうとう富豪の財産も

後は数えるばかり

それでも、止めない贅沢に

とうとう、富豪もあきれ果て

2枚のパンと1輪のバラを

与え、家から追い出した。

クインタトゥージュ憂いもせず

足にパンを、髪に薔薇を

あっぱれゆるせと町びとは

麦の矢を放ち送り出す

ずりずり歩くクインタトゥージュ

足のパンが擦り切れると

もう一枚おくれと男にねだる

1枚のパンの代償に

数分の苦痛と快楽を

こうしてクインタトゥージュは

数歩の歩みと快楽を

交互に続け旅をする

擦り切れるまで旅を続ける

飼葉

大地の命を吸い取って
青く茂る
パンにはならずとも
パンより価値を生む

乙女の指を裂くとしても
男の復讐を受けることはなく
ただ、秋までの命を謳歌する

もしも人がいなければ
木々に場所を侵されて
岩のくぼみに住処を移し
ひっそりと生き続ける

集めても家具にはならず
煮ても薬にはならない

ただ、馬を養い
戦を養い
ただ、牛を養い
赤子を養う

4寸ほどの下草に
頼る人の貧しさに
傲慢など見向きもされず
馬より早く戦を養い
牛よりも強く
田を引いたとして
青々茂る草原は
今だ絶えることなく
ふつつかな人の
生を養う

ハツカ

女は言う

熱のこもった快感に
飽きてしまったのさと
男は嘆く
たぎった肉体から
欲情を放つ以外に
術はなく
こもり続けるその愛が
己を焦がさぬように
ほら穴か
草原で

1000年続いたとしても
花は息子を身ごもらず
闇は乙女を生まない

見かねた雲が叫ぶ
情けない事をするなど
情欲の後では
鳥さえ番い
犬さえ愛をささやく

苦し紛れに男は怒鳴る
それではおまえは何を生む
張り付くようにしけた雲と
冷たい雨と汚い霧と
そんなお前にこの俺の
こもった熱が下げれるか

雲は黙って己の精を
もつれた草に振りまくと
ぷいとそのまま

男は怒りに身を任せ

もつれた草を引き抜くと
帰って女を打ちすえる

女の体温みるみる下がり
温めておくれと腕を出す
男は自分を打ちすえて
体にたまる情欲の
熱だけ放つ

人の荒らぶる情欲の
熱が消えればどうなるか
試してごらんと汚い婆は
汚い小瓶と引き換えに
牛を引き引き来た道戻る
幼い夫婦は情欲を
治めるすべを知らず
熱のこもらぬ冷たい愛を
快樂と呼ぶのに時はかからず

ハルバード

腐った夢を断ち落とす

ドスンザン

醜い獣を撃ち殺す

ドスンザン

高く振り下ろされるその様

ケラウノスにも似て

異教徒の名剣ですら

一撃で粉碎する

ドスンザン

ドスンザン

戦場からその音絶えることなく

ドラムの叫びより勇壮に

ここにありと訴える

薪を割る事も出来ず

木を倒すこともない

いくら乾いたとして

人が燃えるものか

人で住処が作れるか

ドスンザン

やかましいより雄弁に

ドスンザン